

各感染症対策主管課長
各医師会 殿
定点観測医療機関長

福岡県医師会
会長 蓮澤 浩明
(公印省略)

福岡県結核・感染症発生動向調査解析委員会 週報

週報 令和7年—第29週 (R7. 7. 14~R7. 7. 20)

定点	病 名	定点報告数 (○: 警報レベル □: 注意報レベル)						1定点当たり	
		24週	25週	26週	27週	28週	29週	福岡県	全国
		6/9~	6/16~	6/23~	6/30~	7/7~	7/14~	29週 7/14~	
ARI	急性呼吸器感染症	5582	5357	5106	5178	5267	5394	44. 21	54. 03
	インフルエンザ	56	47	35	23	38	85	0. 70	0. 30
	新型コロナ感染症	76	139	183	267	409	411	3. 37	3. 13
小児科	RSウイルス感染症	12	21	14	43	51	116	1. 66	0. 50
	咽頭結膜熱	72	59	67	66	44	52	0. 74	0. 56
	A群溶レン菌咽頭炎	313	247	221	209	210	235	3. 36	2. 20
	感染性胃腸炎	610	532	509	483	394	462	6. 60	5. 30
	水痘	37	31	34	29	42	13	0. 19	0. 34
	手足口病	26	37	41	50	38	43	0. 61	0. 59
	伝染性紅斑	○159	○227	○209	○242	○208	○208	○2. 97	2. 08
	突発性発しん	41	32	30	22	32	31	0. 44	0. 35
	ヘルパンギーナ	159	401	○429	○456	○343	○237	○3. 39	1. 87
	流行性耳下腺炎	11	6	5	5	4	2	0. 03	0. 06
	川崎病 (MCLS)	8	6	4	9	8	6	0. 03	
	マイコプラズマ肺炎	13	25	15	26	35	27	0. 23	
	細菌性咽頭炎	0	0	0	0	0	0	0. 00	
	無菌性咽頭炎	0	0	0	0	0	0	0. 00	
	急性扁桃炎	0	0	1	5	1	2	0. 01	
眼科	急性出血性結膜炎	0	1	0	0	0	0	0. 00	0. 01
	流行性角結膜炎	6	11	12	6	10	15	0. 58	0. 88

月報 令和7年—6月 (R7. 6. 1~R7. 6. 30) (STD 定点数37)

病 名	定点報告数	前月比	主な増加地区等	1定点当たりの患者数	
				福岡県	全 国
性器クラミジア感染症	129	115%	福岡63、北九州36	3. 49	2. 60
性器ヘルペス	61	124%	福岡36、北九州16	1. 65	0. 95
尖圭コンジローマ	20	118%	福岡10、筑豊5	0. 54	0. 60
淋菌感染症	40	125%	福岡23、筑後6	1. 08	0. 73

■ 総 評

▽ 2025年第29週: R7. 7/14-7/20はインフルエンザが定点当たり0. 70と2週連続やや増加、キットではA型34人、B型3人、新型コロナは4週連続増加後、今週は横ばい。福岡県では伝染性紅斑が第20週から警報レベル、ヘルパンギーナも第26週から警報レベルだが、手足口病はまだ少ない。麻疹が全国的に多発し、毎週報告がある。百日咳の報告が多い。第15週に開始のARIは3か月経過、大きな変動はない。検査定点医療機関には伝染性紅斑・ヘルパンギーナ・手足口病の検体提出をお願いします。

■ ARI (R7. 15週より内科定点数78—52 ※ARI 定点は内科定点と小児科定点によって構成)

※ 急性呼吸器感染症: 5週前から5582、5357、5106、5178、5267、5394と推移、大きな変動はない。
 ※ インフルエンザ: 2週連続やや増加、定点当たり0. 70(前週0. 31; 20歳以上42. 4%)、キットではA型34人、B型3人、全国定点当たり0. 30(前週0. 25)。
 ※ 新型コロナ感染症: 4週連続増加後、今週は横ばい(20歳以上62. 3%)、定点当たり3. 37(前週3. 35)、全国定点当たり3. 13(前週2. 40)。

■ 小児科 (R7.15週より小児科定点数120→70)

- ※ RSウイルス感染症:増加傾向(4歳以上0人)。
- ※ A群溶レン菌咽頭炎:発疹合併:3歳男、6歳女。
- ※ 感染性胃腸炎:3歳以下42.6%。
 - ・カンピロバクター:9歳女、11歳男、女、12歳女、13歳男、14歳女、15歳女。
 - ・サルモネラ:04群:11歳女(鳥タタキ)。07群:10歳女(*Plesiomonas shigelloides* も)。09群:2歳女。群未詳:6歳男。
 - ・ロタウイルス:報告なし。
 - ・アデノウイルス:報告なし。
 - ・ノロウイルス:1歳男。
- ※ 水痘:15歳以上0人。ワクチン済例:8歳男(接種時期等不明の2回;軽症)、8歳男(H30.6/27とH30.10/26にロット不明;軽症)。
- ※ 伝染性紅斑:多発が続き、第20週から警報レベル。今後の動向に注意。
- ※ ヘルパンギーナ:減少傾向だが第26週から警報レベル。今後の動向に注意。
- ※ 流行性耳下腺炎:15歳以上0人。ワクチン済例:報告なし。
- ※ マイコプラズマ肺炎:15歳以上3人。報告数少ない。抗原検査:7歳女、8歳女。遺伝子検査:8歳男。
- ※ その他の疾患:ヒトメタニューモ:前週5人、今週2人で減少。

■ 眼科 (眼科定点数26)

- ※ 流行性角結膜炎:キット陽性:5歳女、39歳女、44歳女、48歳男。

■ 基幹 (基幹定点数15)

- ※ 特記すべき報告なし。

■ ウイルス分離

※ 伝染性紅斑:5/12の6歳女からヒトパルボB19。急性呼吸器感染症(ARI):5/19の9か月男からRSウイルスA型、5/26の2歳男からRSウイルスB型、5/19の1歳男、女、6/16の7か月男、6/23の1歳女、6/30の62歳女からヒトパラインフルエンザウイルス3型、5/26の1歳女、6/3の5歳男、6/9の8歳男、6/16の3歳女、8歳男、6/23の3歳男からライノ/エンテロウイルス、6/2の1歳女からヒトパラインフルエンザウイルス3型+4型+ライノ/エンテロウイルス、6/9の1歳男、6/23の4歳女、6/30の2歳女からライノ/エンテロウイルス+アデノウイルス、6/10の6歳男、6/16の1歳男、8歳男からアデノウイルス、6/18の35歳女からヒトパラインフルエンザウイルス4型。[北九州市保健環境研究所]

■ 全数報告

- ※ 腸管出血性大腸菌:全国今週148人、全国累計1324人、福岡県今週8人、福岡県累計103人。
- ※ エムボックス:全国第14週1人(東京都)、全国累計1人(東京)。
- ※ 重症熱性血小板減少症候群:全国今週3人、全国累計112人、福岡県第28週に1人、福岡県累計3人。
- ※ デング熱:全国今週3人、全国累計81人、福岡県今週1人、福岡県累計5人。
- ※ 劇症型溶レン菌感染症:全国累計851人、福岡県累計46人。
- ※ 梅毒:全国累計7715人、福岡県累計419人。
- ※ 百日咳:全国累計52490人、福岡県累計2071人。12歳女2人(内1人はEIA+)、12歳男(父弟2人に同症状)はLAMP陽性。
- ※ 風しん:全国第29週に0人、全国累計8人(秋田1、栃木1、東京1、富山1、静岡1、京都1、大阪1、山口1)。
- ※ 麻しん:全国第29週に6人(埼玉県→神奈川県と熊本県)、全国累計190人(北海道→大分;福岡3、熊本1、大分2)。

※ 福岡県医師会ホームページの感染症情報欄にも掲載されていますので下記URL及びQRコードよりご参照下さい。

URL: https://www.fukuoka.med.or.jp/doctors/kansenshou/_11717.html

ホーム>医師の皆様>感染症・予防接種>感染症発生動向調査

青木知信



定点把握対象疾患 1 定点医療機関当たり患者数 【保健所別】

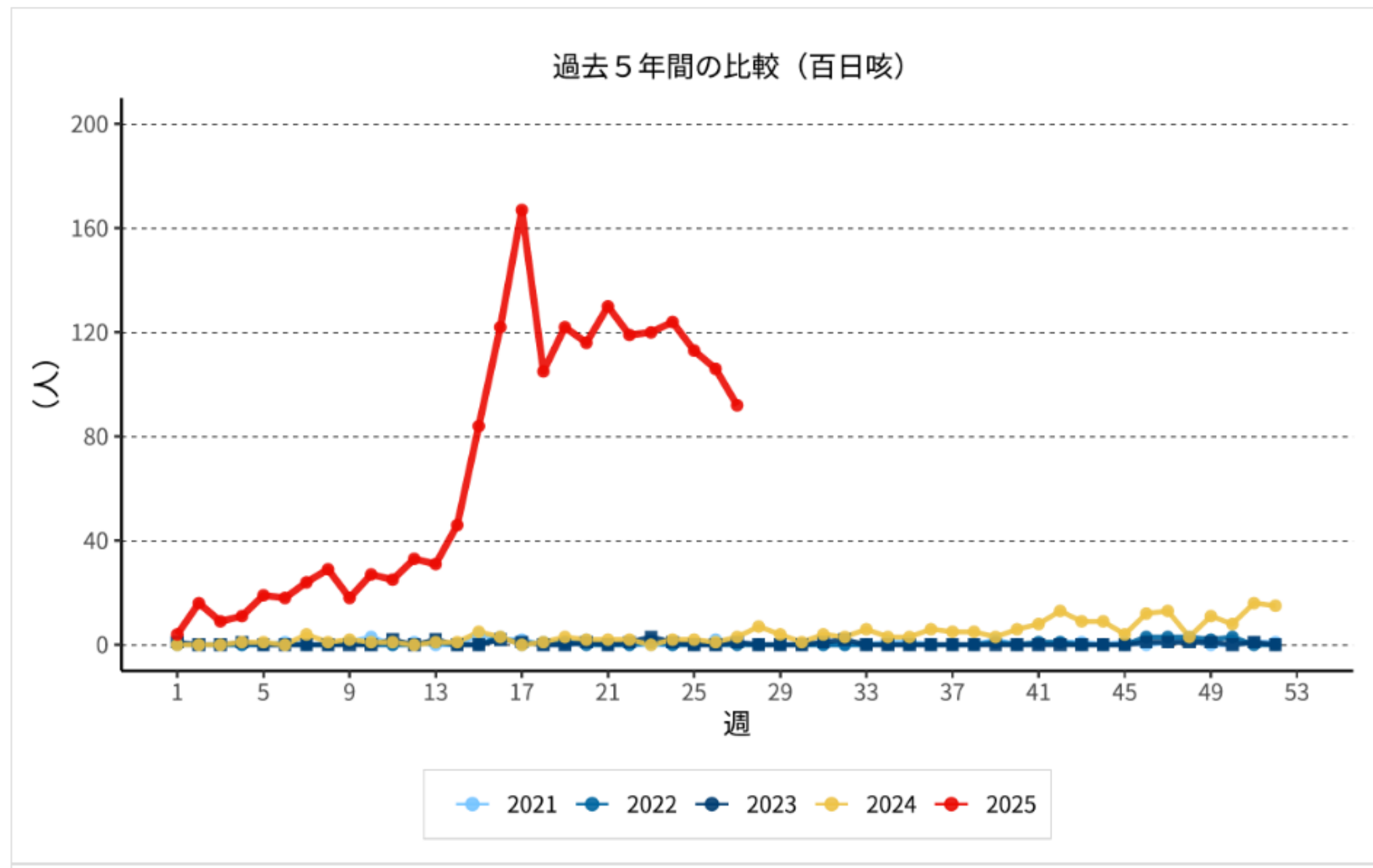
定点把握対象疾患 報告数 【年齢階級別】

[illegible]

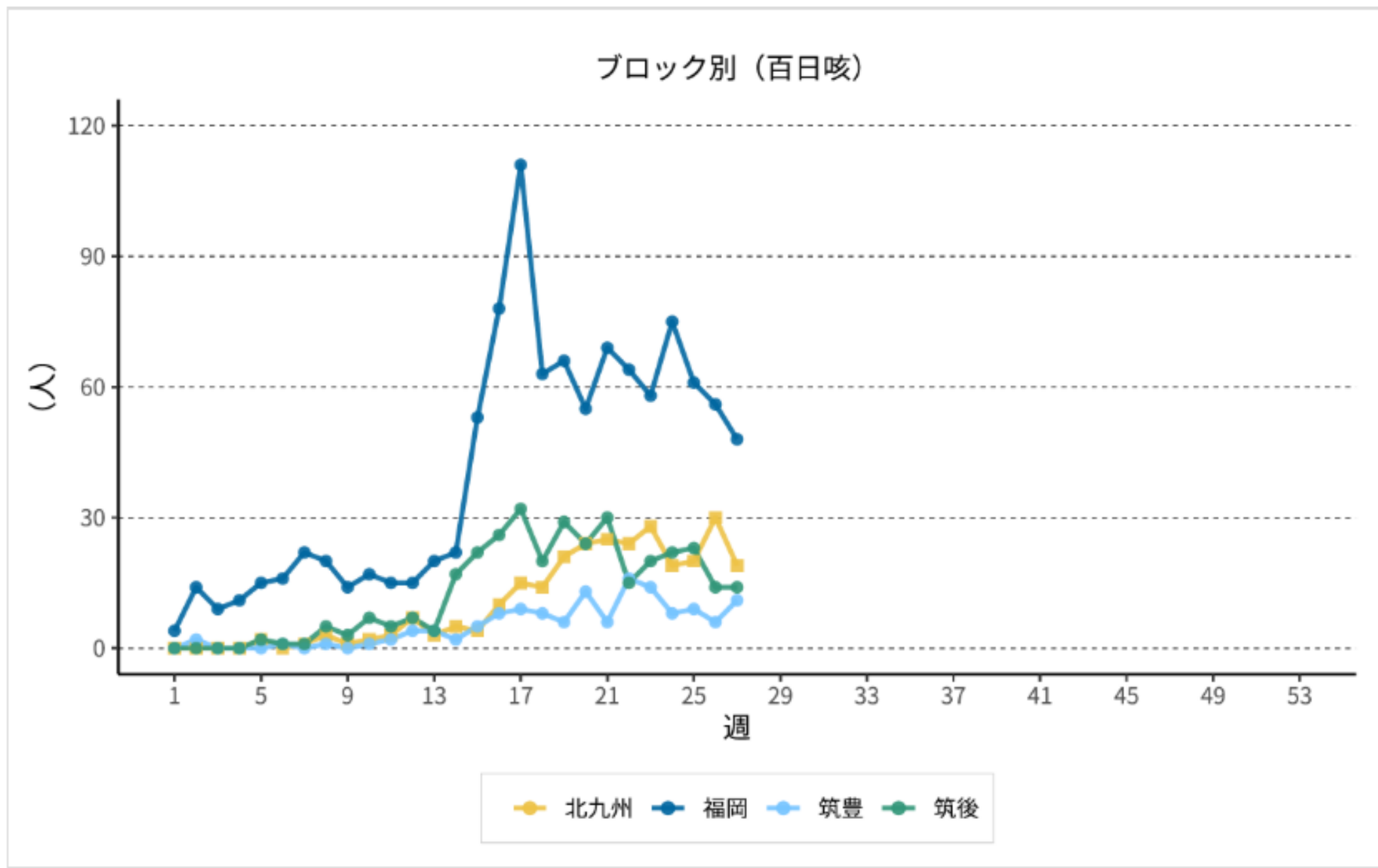
全数把握対象疾患発生状況

令和7年－第29週(R7.7.14～R7.7.20)

感染症 類 型	日付 疾病名	福岡累計					福岡					全国
		2020	2021	2022	2023	2024	26週	27週	28週	29週	25年 累計	29週
二類	結核	759	757	733	718	883	22	12	11	17	405	247
三類	細菌性赤痢	1			1	2						1
	腸管出血性大腸菌感染症	181	182	254	215	172	7	4	15	8	103	148
	腸チフス				2	3					2	
	パラチフス											
四類	E型肝炎	4	6	1	9	8			1		3	10
	A型肝炎	5	2	5	3	11					6	1
	エムボックス				1	1						
	ジカウイルス感染症				1							
	重症熱性血小板減少症候群	2	1	5	2	4			1		3	3
	チクングニア熱			1	1	1	1			1	3	1
	つつが虫病	4	3	7	6	1					1	
	デング熱	1		10	14	10				1	5	3
	日本紅斑熱		7	6	11	8		1			5	9
	ボツリヌス症	1										
	マラリア	2		1	2	1						1
	ライム病			1	1							
	レジオネラ症	56	60	71	89	77	3	1	2	2	36	30
	レプトスピラ症		1	3		3						
五類	アメーバ赤痢	14	17	26	22	25	1				11	3
	ウイルス性肝炎	13	8	6	9	6	1				4	4
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	116	128	110	112	147		2	1	1	49	11
	急性弛緩性麻痺	2		3	5	1					1	1
	急性脳炎	24	22	22	35	29				1	21	5
	クリプトスポリジウム症	1			2	1						1
	クロイツフェルト・ヤコブ病	3	7	9	6	6	1				2	4
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	26	23	32	48	67	1		1	2	46	18
	後天性免疫不全症候群	41	54	63	59	56	1	1	1	1	23	13
	ジアルジア症	1	2	2	1	3						
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	14	14	13	19	28			2	1	19	9
	侵襲性髄膜炎菌感染症			1		3		1			3	2
	侵襲性肺炎球菌感染症	79	81	64	89	116	2	2	3		97	31
	水痘(入院例に限る)	17	16	5	12	27		1	1	2	20	13
	梅毒	314	348	566	942	880	12	11	4	10	419	188
	播種性クリプトコックス症	6	5	3	10	7					4	
	破傷風	3	2	3	6	1						2
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	9	3	5	4							
	百日咳	105	29	25	24	216	97	92	97	118	2,071	3,908
	風しん	5		1	1							
	麻しん	1	1			1					3	6
	薬剤耐性アシネトバクター感染症	1	1	1								
計		1811	1780	2058	2482	2805	144	128	140	165	3,365	4,673



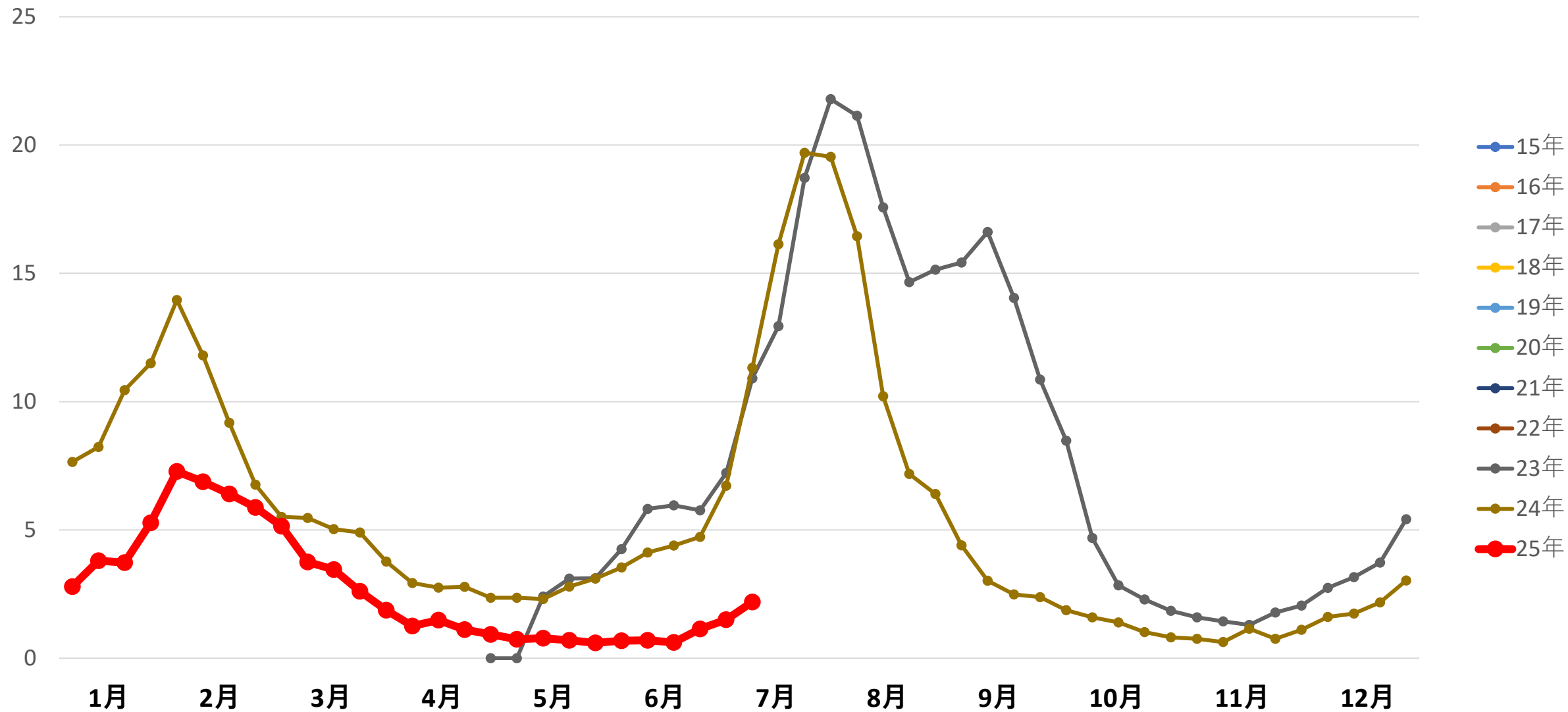
出典：福岡県HPより https://www.fihes.pref.fukuoka.jp/~idsc_fukuoka/idwr/idwr-f00.html



出典：福岡県HPより https://www.fihes.pref.fukuoka.jp/~idsc_fukuoka/idwr/idwr-f00.html

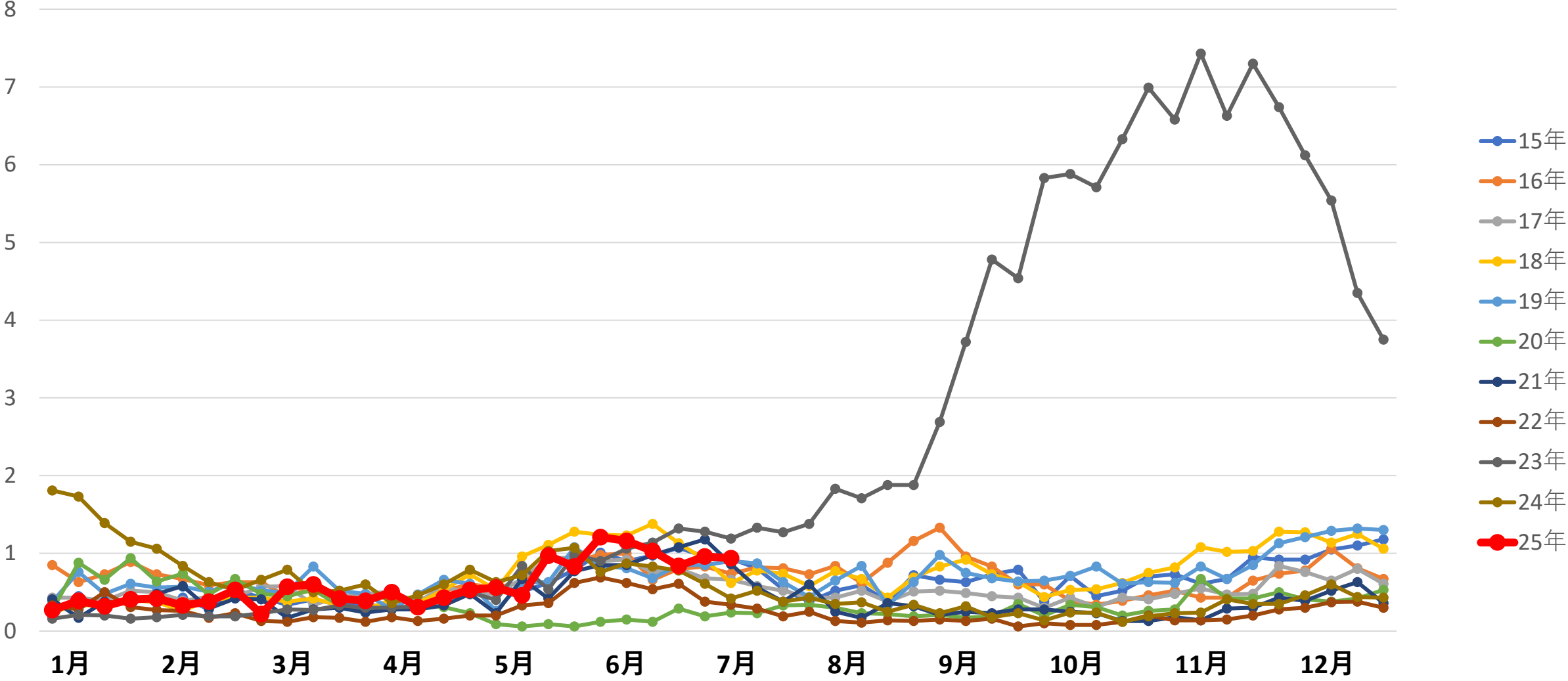
新型コロナウイルス感染症（過去10年間との比較）

(定点値)



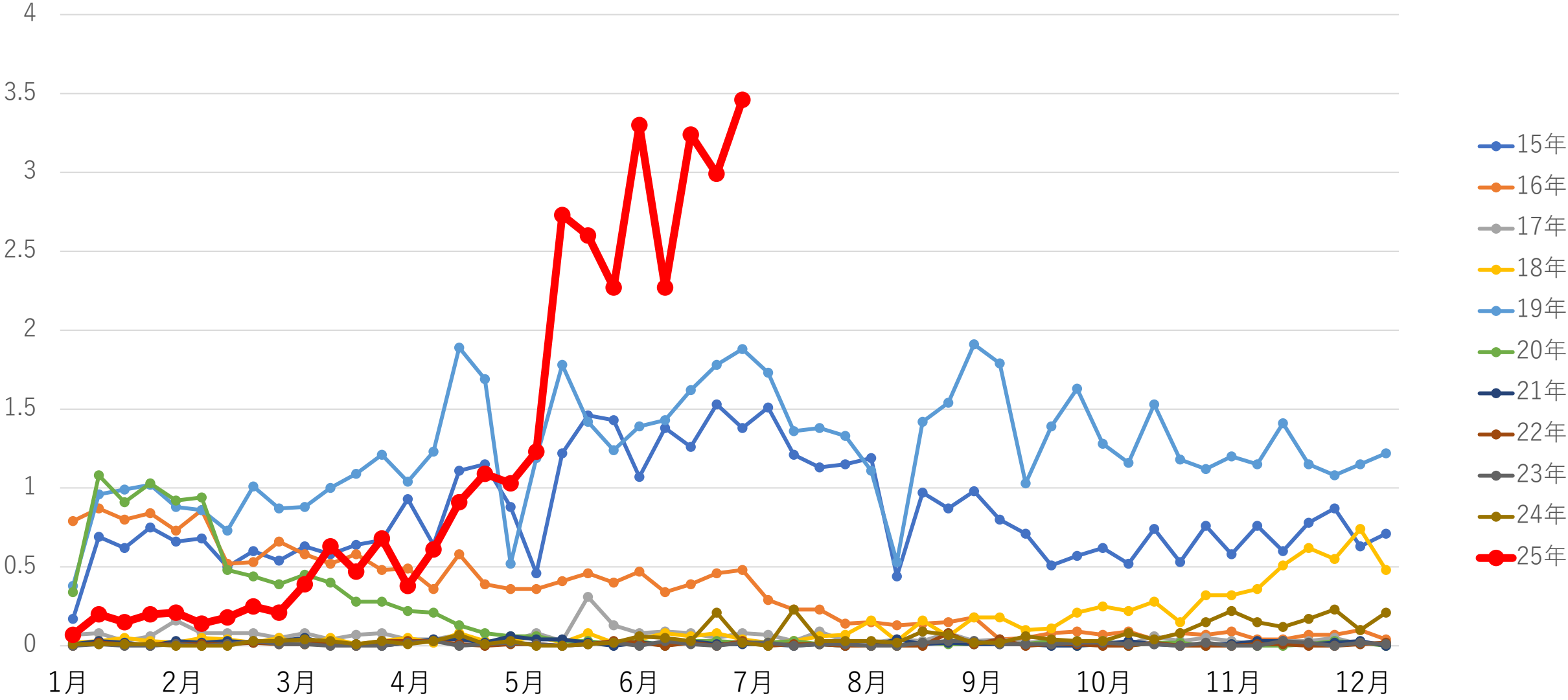
咽頭結膜熱（過去10年間との比較）

(定点値)



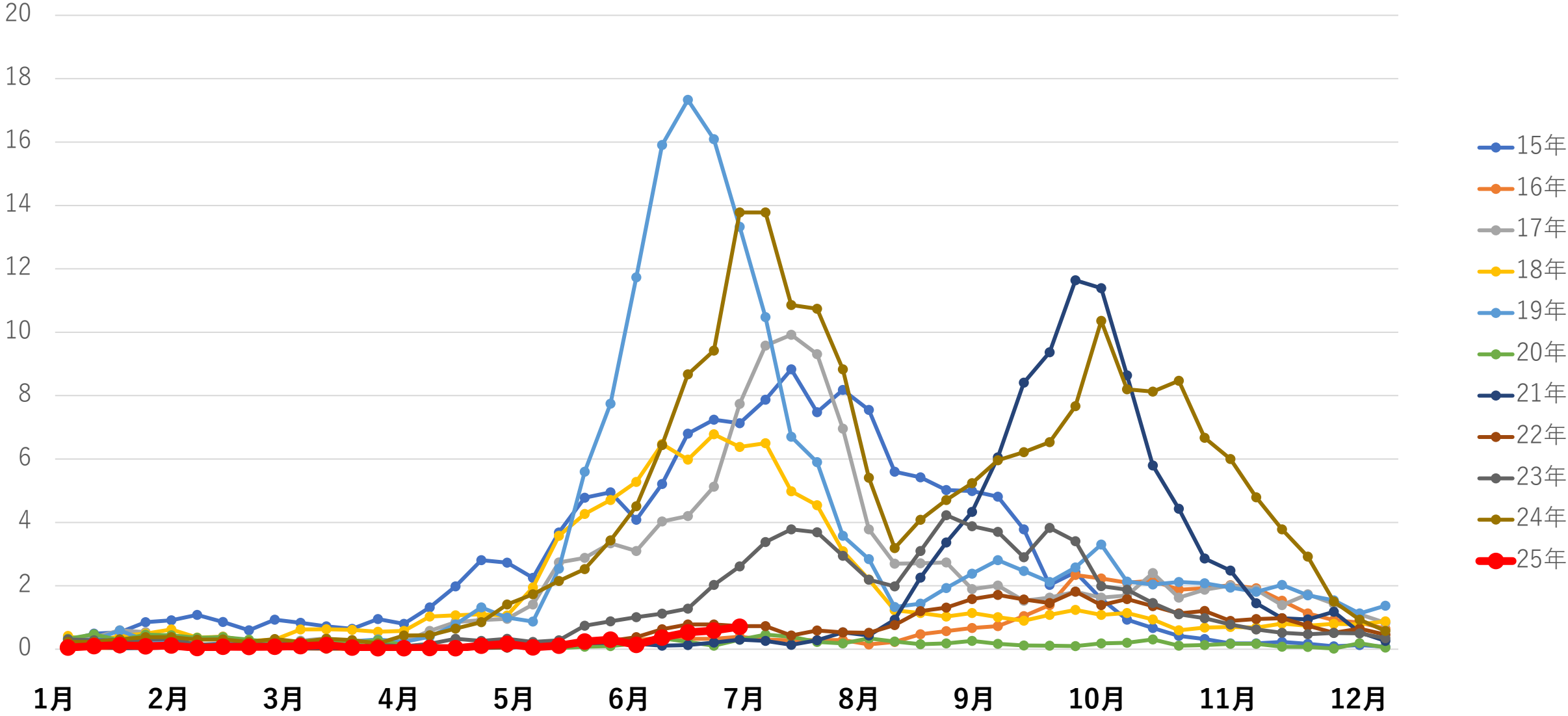
伝染性紅斑（過去10年間との比較）

(定点値)

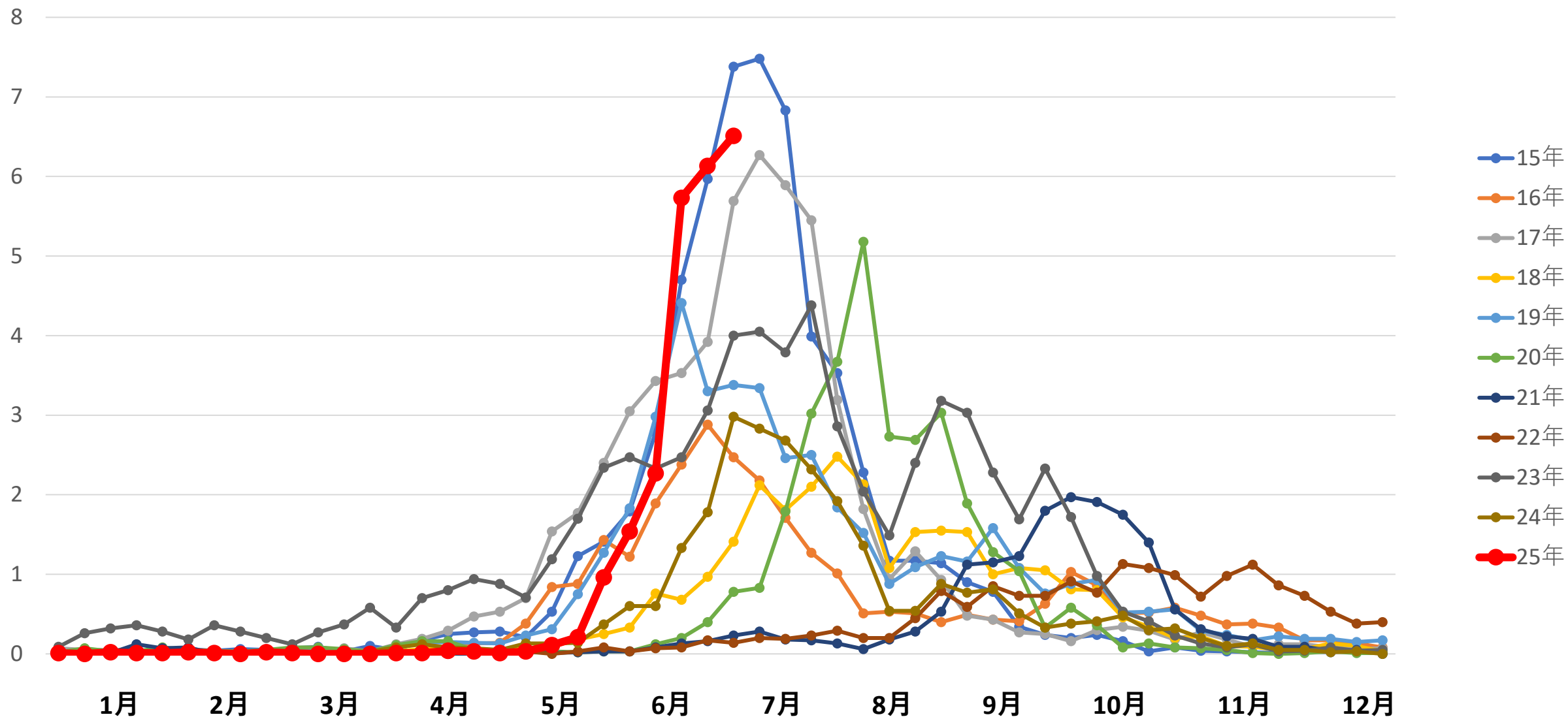


手足口病（過去10年間との比較）

(定点値)



(定点值)



百日せきにご注意ください

百日咳菌の感染によって、激しいせきの特徴とする急性の気道感染症です。

乳幼児では、激しいせきによる

無呼吸発作

むこきゅうほっさ

チアノーゼ

顔色や唇、爪の色が紫色に見える状態



けいれん

呼吸停止

に進展することがあります。

こんな症状がみられます

カタル期（約2週間持続）
かぜ症状で始まり、次第に咳の回数が増えて程度も激しくなります。

▼
けいがい

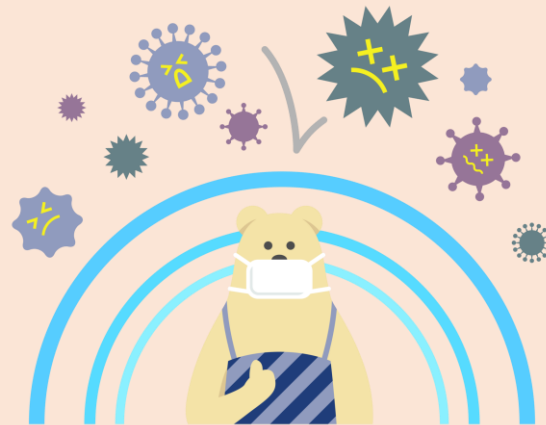
痙咳期（約2～3週間持続）
発作性、けいれん性の咳が出るようになります。合併症として肺炎や脳症などもあり、乳児では注意が必要です。

▼

回復期
激しい発作は次第に減衰し、やがて回復に向かいます。回復まで、全経過で約2～3か月かかります。

予防と対策

百日せきの予防には、生後2か月から定期接種として接種可能な5種混合ワクチン（DPT-IPV-Hib）等の接種が有効です。ただし、接種後年数が経過した人等での発病も見られます。マスク着用、手洗いなどの基本的な感染症対策を心がけましょう。



せきが続く場合は、医療機関の受診をご検討ください。

受診を迷った場合や夜間・休日の場合は、「こどもの救急 <https://kodomo-qq.jp/>」のサイトを参照したり、「#8000（こども医療電話相談）」にご相談ください。

詳しくは、厚生労働省ホームページをご覧ください



夏を安全に楽しもう！

感染症対策ガイド

海に山にキャンプに、家族や友人と集まってワイワイするのも楽しそう。でも、油断は大敵！ 夏に多く発生する感染症もあり注意が必要です。どんな感染リスクがどこに潜んでいるのか、感染予防の基本を押さえて大いに夏を楽しみましょう。

健康生活衛生局
感染症対策部
感染症対策課
感染症情報管理室長
横田 栄一



アウトドアレジャーは
肌の露出が少ない服装で

夏は病原体を媒介する蚊やダニの活動が活発化します。こうした害虫に刺されると、蚊媒感染症やダニ媒介感染症といった動物由来感染症にかかる危険性が高まります。蚊やダニが多く生息する野外に出かける時や熱帯・亜熱帯地域へ旅行する時は、事前に予防対策を行うことが大切です。

特に、急激な発熱で発症する「デング熱」「マラリア」などの蚊媒感染症は、東南アジアやアフリカ、中南米で流行しており、感染すると命に危険が及ぶこともあります。海外へ渡航する際は、行き先での注意点や予防接種情報などの事前チェックも忘れずにしてください。一方、国内においても、「つつが虫病」や「重症熱性血小板減少症候群（SFTS）」といったダニ媒介感染症の発生地域に広がりがみられます。また、野生動物や沢の水を介して感染するエキノコックスにも注意が必要です。野外でレジャーを楽しむ時は、肌の露出の少ない長袖・長ズボンで、明るい色の服（マダニを目視で確認しやすい）を着用するなどして、感染症から身を守りましょう。

OUTDOOR

© matsu - stock.adobe.com

1
デング熱



1

デング熱

(特徴)

熱帯や亜熱帯地域で流行している感染症。急激な発熱で発症し、発疹、頭痛、骨関節痛、嘔吐などの症状が現れます。デング熱の発生地域へ渡航する際は、虫除け剤を使用するなど蚊に刺されないようにしてください。

(感染経路)

ウイルスに感染した患者を吸血した蚊の体内でウイルスが増殖。その蚊が他者を吸血することで感染します。

2

日本脳炎



3

つつが虫病

(特徴)

潜伏期は5～14日。全身の倦怠感、食欲不振とともに頭痛、悪寒、発熱などを伴って発症します。体温は段階的に上昇し、数日で40℃にも達することがあります。

(感染経路)

病原体の、つつが虫病リケッチアを保有するつつが虫に刺されて感染します。刺し口は皮膚の柔らかい隠れた部分に多く、日本では北海道を除く全国で発生がみられます。

2

日本脳炎

(特徴)

感染後1～2週間の潜伏期を経て、突然の高熱、頭痛、嘔吐などで発病し、意識障害や麻痺等の神経系の障害を引き起こす病気です。

(感染経路)

日本脳炎ウイルスの感染による急性脳炎で、感染したブタを吸血した蚊（コガタカイエカなど）に刺されることによりヒトに感染します。

4

SFTS

3

つつが虫病



4

重症熱性血小板減少症候群（SFTS）

(特徴)

2011年以降、日本、中国、韓国、台湾、ベトナムなどで発生が確認されているダニ媒介性の感染症。主な初期症状は発熱、全身の倦怠感、消化器症状で、重症化すると命に危険が及ぶこともあります。

(感染経路)

SFTSウイルスを保有するマダニに刺されると感染します。SFTSを発症しているネコやイヌなどの動物を介してヒトが感染することもあるので、動物に咬まれたり、体液に直接触れたりした時にも注意が必要です。

5

エキノコックス

(特徴)

エキノコックスと呼ばれる寄生虫による感染症です。日本では北海道のキタキツネが主な感染源で、感染すると数年から十数年たって肝機能障害などの自覚症状が現れます。野外では野生のキツネやイヌに接触しない、沢や川の生水は虫卵に汚染されている可能性があるため飲まないようにしてください。

(感染経路)

キツネなどから排泄された糞中の虫卵が口から入ることで感染します。

5

エキノコックス



感染対策基本のキ

1 流水と石けんでの手洗い

2 よく触れる物のアルコール消毒

3 可能な範囲でのマスク着用

からだに不調を感じたら

医療機関に相談しましょう

感染症の初期は発熱や咳などで発症しますが、猛暑で体力や免疫力が低下すると、感染リスクも高まります。「変だな？」と思ったら、医療機関に相談してください。

感染症についての情報はこちら



4

ヘルパンギーナ

(特徴)

発熱と喉の痛みが主な症状の夏かぜの一種です。合併症として、熱性けいれん、特に乳児では脱水症、まれですが小児では髄膜炎や心筋炎などに注意が必要です。発症後4週間後頃までは、便からウイルスが排泄されるため、おむつ交換の後はしっかり手洗いしてください。

(感染経路)

感染経路は、便からの感染を含む接触感染と飛沫感染です。

4

ヘルパンギーナ



5

手足口病

5

手足口病

(特徴)

口の中や、手足などに水疱性の発しんが出る感染症です。こどもを中心に感染し、多くが数日間のうちに改善しますが、まれに重症化することがあり注意が必要です。

(感染経路)

飛沫感染、接触感染、糞口感染(便の中に排泄されたウイルスが口に入って感染)が知られています。



INDOOR

2

新型コロナウイルス感染症

(特徴)

令和5年5月に感染症法上の「5類感染症」に移行されましたが、リスクの高い感染症に変わりはありません。引き続き基本的な感染対策を心がけ、自分や周囲への感染を防ぎましょう。

(感染経路)

患者から排出されるウイルスを含む飛沫、さらに小さな水分を含んだ粒子(エアロゾル)の吸入、感染者の目や鼻、口に直接的に接触することにより感染します。

3

咽頭結膜熱

3

咽頭結膜熱

(特徴)

アデノウイルスの感染により、発熱、のどの痛み、結膜炎といった症状が数日続く、こどもに多く見られる感染症です。感染者が使ったタオルなどにウイルスを含んだ目やに、唾液、鼻水が付着していることもあるので、タオルの共用は避けましょう。

(感染経路)

主な感染経路は飛沫感染、接触感染です。

1

RSウイルス感染症

(特徴)

RSウイルスによる呼吸器感染症です。生後6ヵ月以内の乳児、基礎疾患のある小児や高齢者がかかると重症化する可能性があるため、注意しましょう。

(感染経路)

主に接触感染、飛沫感染によって感染します。

2

新型コロナウイルス感染症



1

RSウイルス感染症



© matsu - stock.adobe.com

咳エチケットなどの基本的な対策が必要

この時期は、「夏かぜ」といわれる「手足口病」「ヘルパンギーナ」「咽頭結膜熱」などの感染対策も気になる場所です。

「夏かぜは、こどもがかかる



時岡 史明

健康生活衛生局
感染症対策課
感染対策課
医療体制専門官

もの」と思われがちですが、夏かぜの原因となるウイルスの型には多くの種類があり、1シーズンに何回もかかる大人も少なくありません。

また、近年夏期に増加傾向がみられている「RSウイルス感染症」や「新型コロナウイルス感染症」もまだまだ注意が必要です。

いずれの感染症も手洗いや「咳エチケット」、換気などの基本的な感染対策が重要です。発熱やせきに加えて、呼吸が苦しい、食事や水分が摂取できないといった症状が見られたら、すぐに医療機関に相談しましょう。